

## ここは桑原欣勝寺（三田市桑原）

むかし、いたずらであわてものの、カミナリがいました。ある日、夕立雲（ゆうだちぐも）の上から下界（げかい）を眺めて（ながめて）言いました。

「ここに大きな寺（欣勝寺）があるぞ。ひとつ落ちてこまらしてやるか。」そう言い終わる（おわる）や、一目散（いちもくさん）に、この寺めがけて落下（らっか）しました。しかし、そこは、あわてもののカミナリのこと、目標（もくひょう）をあやまって、その寺の横にある深い古井戸（ふるいど）にとびこんでしまいました。

住職（じゅうしょく）が大きな音に驚いて（おどろいて）、とび出しますと、井戸の中で、何者（なにもの）かが助けを求めて（もとめて）いました。

住職が急いで井戸のをぞくと、今まで見たことのない奇妙（きみょう）な動物が、もがきもがき、外へはい出そうとしていましたが、手がすべって思うようにいきません。住職が、「お前は、見たことのない動物だがだれだ。」と叫ぶ（さけぶ）と、「わたしはカミナリのこどもです。あやまって、この井戸に落ちこみました。どうかお助け下さい。」と、泣くように頼む（たのむ）のでした。住職は、びっくりして、「カミナリなら助けるわけにはいかない。そこで、よく考えるがよい。」と言って、竹あみでふたをしてしまわれました。



カミナリのこどもは、前より声をはりあげて、「もう、いたずらは絶対（ぜったい）にしません。二度とこの村には落ちませんから助けて下さい。」と頼むので、住職は、ちよっぴり、かわいそうになり、そのことばを信用して、井戸のふたをとってやりました。カミナリのこどもは、大変喜び（たいへんよろこび）、何度も礼を言って、見送る（みおくる）住職に手をふりながら、空へ帰っていきました。空へ帰ったカミナリのこどもは、下界での様子や住職との約束（やくそく）のことがらを、親や兄弟に話しました。カミナリの父は、こどもをいましめると共に、欣勝寺の住職に感謝（かんしゃ）して、それから、カミナリは、二度と桑原に落ちたことがないと言われています。

今でも、カミナリがなると、人々が、「ここは桑原欣勝寺！」と唱え（となえ）れば、落雷（らくらい）せぬといわれ、梅雨（つゆ）の頃から夏にかけて、雷神除（かみなりよけ）の守護札（しゅごふだ）を授る（さずかる）参詣（さんけい）人が多いことでも知られています。